Publication: Nikkei, p 30
Date: 23 November 2014
Headline: Hot debate on inclusive society

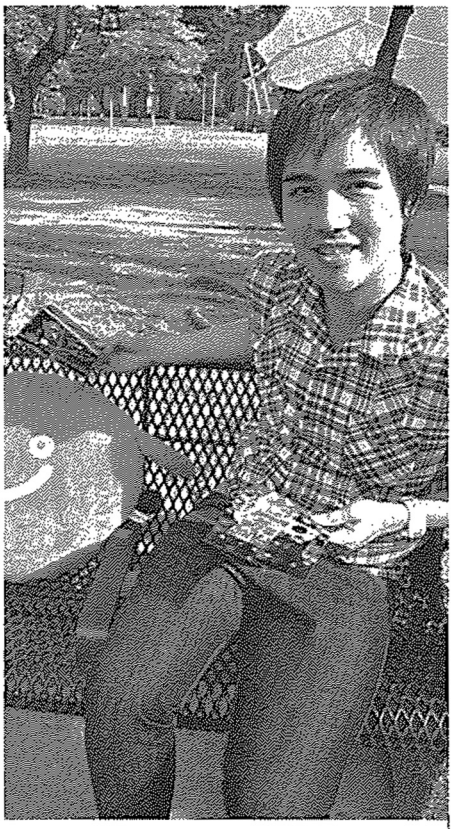
寛容の社会 議論熱く

同性愛 シンガポールで絵本きっかけ

シンカポールで性に対するとらえ方についての議論が活発になっている。きっかけは同性愛をテーマにした1冊の絵本。公立図書館での所蔵を認めるかどうかを巡り、異なる立場の人々が意見を戦わせた。様々な宗教や人種の調和を重視してきた多民族国家が、社会に広がりつつある新たな価値観との向き合い方を模索し始めた。

図書館が撤去

オス同士のペンギンが動物園でカップルになり、ともに子育てをする――。米国の絵本「アンド・タンゴ・メイクス・スリー」（日本語題「タンタンタンゴはパパふたり」）がシンガポールの大型書店で今年、絵本のベストセラーの1冊となった。図書館には貸し出しを求める人々が列をつくる。



集会のあった公園で「議論を通して共存につなげたい」と語るチョアさん

一アンド・タンゴー」など同性愛を取り上げた3種類の絵本が7月、所蔵する国内の公立図書館から一斉に姿を消したことが人気を誘発した。「同性カップルを家族として描いており、国民が持つ家族の価値観に反する」。一部利用者の苦情を受け、国家図書館庁が撤去を決めたためだ。

伝統的な家族観を重視する人々は図書館での動きを支持したが、3種類の絵本を「多様性を描いた良書」とみる側は反対の署名活動を展開。同庁は最終的に、廃棄せず残っていた2種類を大人向けの書棚に戻すことで事態を収拾した。

英語、マレー語、中国語などを公用語とし、仏教やキリスト教、イスラム教など複数の宗教を信仰する市民が共存するシンガポールは、異なる文化や立場に対する「寛容さ」を社会で追求してきたとされる。ただ、性の価値観を巡る議論は必ずしも積極的に交わされてきたとは言いがたい。

国立のシンクタンクが1月に発表した国民の社会観に関する調査でも、同性愛を「正しくない」と答えた人が回答者の7割超を占めたが、リー・シェンロン首相が「保守的」と評した社会の風潮が近年、少しずつ変化を見せつつある。

中心部の公園で6月、今年で6回目となる同性愛支持者集会「ピンク・ドット」が開かれ、約2万6千人がテーマカラーのピンクをまとって集まった。集会を有志と主催する男性、ペイリン・チョアさん（38）は「ネット世代は人と違う意見を持ち、主張することを恐れなくなっている」と話す。

参加者10倍超に

参加者は第1回の約2500人から10倍以上に増えた。にこやかな家族連れの姿が目をひくようになったが、反対派にも同性愛への抵抗を示す白の服装に統一して集合したり、ネット上で伝統的な家族観の尊重を訴えたりする動きがある。

国内の社会・政治問題に詳しいシンガポール経営大のユージン・タン教授は「社会が多様化し、成熟に向かう一過程といえる。意見のぶつかり合いは今後も増えていく」とみている。

（シンガポール＝谷繭子）

世界 いまを刻む

新たな価値観と向き合う